

# 日本の建築と 縄文文化

武蔵野学院大学日本総合研究所  
スペシャルアカデミックフェロー

関 裕二



Yuji Seki

## 日本の美と縄文文化

「日本でもっとも美しい建築物は何か」と問われれば、即座に「東大寺転害門」と答える。シンプルだがダイナミック、それでいて繊細で、無駄のない完璧な造形美だ。

日本は大陸や朝鮮半島から流入する先進の文物の恩恵にあずかっていた。渡来人も古墳時代（三世紀後半から六世紀末）に相当数流れ込んでいる。だから、日本の仏教美術は、亜流とみなされがちだ。

ただし列島人は、完ぺきなコピーをしたわけではない。列島人の感覚にそぐわないものは切り捨てる不思議な「癖」があった。それはなぜかといえば、一万年以上続いた縄文文化が、列島人の「心（センス）の核」を作り上げていたからだろう。外来の文化を受け入れつつも、うまく咀嚼し、新たな美を作り出す能力を備えていたのだ。

稲作が北部九州に流入したあと、弥生土器が造られていくが、何度も縄文的な文様が復活し、文化の揺

り戻しが起きていた。弥生と縄文のはっきりとした時代区分をどこに引いて良いのか、わからなくなっている。

六世紀後半に日本に仏像が伝わったあと、仏師や工人たちは縄文時代から続く個性的な感性で、独自の美を追い求めた。仏教美術は日本に伝わって完成したと言われているが、東大寺転害門は、その集大成といっても過言ではない。

## 「三匹の子豚」と木の家

縄文文化の名残は、今でもそこかしこに見つかっている。

例えば土器の発明によって、縄文人は世界最古級の「鍋料理」を食していたが、現代の日本食の中心にも「煮る料理」が位置している。

建築でも、縄文文化は長く影響を与えてきた。建築学者の上田篤氏は、日本の民家建築は、縄文時代と弥生時代、ふたつの文化のハイブリッドで、近代にいたるまで残っていたと指摘した（『日本人とすまい』岩波新書）。「土間」は縄文時代

の「竪穴式住居」で、「高床」は弥生時代の「高床式住居」だという。

ところが空襲（焼夷弾）によって、日本の都市部の木造建築は、ほぼ消滅してしまった。焼け野原から見事に復興した日本だが、都市も農村も、かつての「風光明媚」な景色は、ほぼ姿を消した。また「敗戦」は、日本文化を恥じる風潮を生み出し、コンクリートとモルタルと耐火



竪穴式住居 妻木晩田遺跡（鳥取県）

本の美意識からかけはなれた代物ではないか。伝統と文化を否定してしまっている。建築家の責任は大きいと思う。

ヨーロッパの古い童話に「三匹の子豚」がある。ワラや木で家を作った子豚は、オオカミに食べられ、レンガで造った家が、一番優秀だと語られている。ここに、レンガや石の文化圏の人々の、木の文化圏に対する優越感を感じとってしまうのだ。ワラや木の家（未開、野蛮）からレンガの家（文明）へ進歩したという、図式が透けて見える。

敗戦後の日本は、「三匹の子豚」の童話を、素直に受け入れてきたように思う。そもそも近代日本は、盲目的に西洋文明を追ってきたのだ。木の家を恥じ、レンガの家を造った豚を礼讃する物語に、違和感を覚えることはなかった。

しかし、改めて考えてみれば、ワラや木の方が快適に過ごせる地域は地球上いくらかもある。クーラーやエアコンが発達する以前、茅葺きで木造の家屋が、夏の暑さをし

のぐための最適な構造を持っていたことは、改めて述べるまでもあるまい。

## 見直すべき日本文化

民族の伝統を見直し、回帰する時代がやってきたと思う。日本人の歴史と文化は、けつして恥じるようなものではない。

例えばヤマト建国（三世紀後半）のきっかけを作ったのは「強い権力を嫌う人々」ではないかと考古学者は疑い始めている。

神話のなかでスサノヲは「朝鮮半島には金属の宝があるが、日本には浮く宝（木材）が必要だ」と述べ、植林事業を始めている。ヤマト建国直前の朝鮮半島や中国では、冶金の発達の結果、森を失い、飢饉と天候不順に悩まされ、戦乱と人口減が起きていた。これが『三国志演義』や『三国志』の本当の時代背景なのだが、スサノヲは「殺し合う文明社会」を反面教師にしたのだろう。その延長線上に、ヤマト建国がある

（拙著『スサノヲの正体』）。  
文明社会は一神教的で、自然を改造し支配しようとする論議、政敵に復讐を誓う（『旧約聖書』）。一方日本のような多神教世界の人々は、大自然を神とみなし、恐れかきこまるとも嫌い、共存を旨とした。

聖武天皇は東大寺建立の詔のなかで「人だけではなく、動物や植物も栄えるように」と願い、「一握りの土でも良いから持ち寄って、みなで盧舎那仏を造立しよう」と呼びかけている。東大寺に多くの美が集約されているのは、このような心優しい「志」が隠されていたからではないだろうか。

ヨーロッパの石の家屋は、焼けずに残る。だから、古代、中世の美を今に伝えている。近代以降の日本の住居は、文化と歴史の断絶の上になり立っている。日本人は、流れ込む文明や技術を自己流にアレンジして、風土に合った文化に仕立て直すことが得意だったはずだ。新たな美、新たな建築を見てみたい。